

第2回有機農業アカデミー（仮称）カリキュラム検討委員会 議事録

1 カリキュラム及び講師（案）について（資料2，資料3）

委員） 学生が実際に座学で参考書なり教科書、これらを特段指定しない、前に並んでいるものでどうだろうかという話だったが、口はばつたいが、土壌協会では土壌医の検定試験やっており、おかげさまで実践を意とする受講生には大変人気がある。1級から3級のランク別教科書を多数出版しているので、生徒には3級にあたる部分を徹底的に、時間の許す限り講義していくべきかと思う。やはりこれ（教科書）ではちょっと分厚すぎる。内容が多岐にわたっている。土壌肥料に関して言えば、ある程度集中して分かりやすく説明するのが建前と思われるので、私としてはこういう資料から特に重要な部分を抜粋して、限られた講義時間で教えたいと思っているがどうか。

事務局） 資料2の1枚目に共通科目を記載しており、右から2列目の教科書の欄にプリントと書いた科目がいくつもある。これは講師先生が持っておられる教材を使って教えて頂いているという意味。このように講師の方に教材を決めて頂くというのが筋だと考えている。

今回記載している教科書（案）は、事務局が指導内容を資料としてまとめていくときに、何も無い状態では作れないので、他県がどういった教科書を使っているかを参考に、目次から指導すべき内容を抜き書きしたということで、最終的な教材は、講師に決めて頂くこととなる。

委員） 講師（案）で授業をご依頼頂いているが、時間と内容について質問がある。案としては30時間の科目となっており、農大職員、イオンアグリ、バイオマーケットと三者で行うように記載されているが、当社で言うと生産者やメーカーから商品を仕入れて、それを卸売りでスーパーや会員に販売するということをやっているもので、こんな事を仕入れの面や販売の面でやっているということをお伝えすることはできるが、10時間も話すことができない。1, 2時間程度が限界と思うのと、イオンさんとの話す内容の棲み分けが、イオンさんも小売りをされていますので、どう棲み分けするか疑問に思っている。

事務局） 実際は、記載しているとおり、農大の職員が30時間全体の授業の流れを構成して、その部分々々を実際に流通や小売りをやられている方に講義をお願いして行くことになると考えている。なので、流通・販売の教科書があるが、その中に、日本の基本的な農産物の流通ルートが掲載されており、その中でも有機農産物の販売方法はいろいろな形態があるので、例えばバイオマーケットさんならこうやられている、イオンさんならこうやられているという事例として、90分の授業でそのままお話し頂くことをお願いいたしますという依頼の仕方になると思う。また、イオンさんにも同じように事例をしてお話し頂く、その中で、仕入れて売ると言う事が同じやり方かぶってもいい問題ない。それぞれ、バイオマーケットさんはこうだ、イオンさんはこうだ、他の会社はこうだ、直売所はこうだ、ということをお話していくようになる。

委員) あと、消費者や会員とのつながりもあるので、そういう方と生徒さんとの接点を持って頂くと言うことが可能なのかなと思う。それがこの授業の中なのか別の授業なのか、また、行って頂くのかこちらに来ていただくのかなど、そのあたりはどうか。

事務局) 資料を見ていただくと、農大の職員が全体をコーディネートする科目がいくつかあり、流通・販売・マーケティングや先進事例講義、校外学習などもそうなっているので、そのどれかの科目の中で、農大職員が構成を考えて具体的なご相談をさせていただくことになると思うので、それにご対応いただければと思う。

委員) 検討中と言うことか。

事務局) 現在の農大の授業でも、毎年担当になった職員が、今年はこちらを見に行こうとか、どういったことを学ばせようかと考えて当たっていくので、同様の形になる。

委員) イオンアグリ創造さんも同じように対応いただけると言うことでよろしいか。

委員) もちろん大丈夫。

委員) 司会だが、質問してもいいか。土壤医検定3級というのはテキストを作成されているのか。

委員) 私は、土壤医検定3級の教科書の中から有機農業に一番重要なところを書き出しながら、それをファイルとして学生がいつでも見られるような格好の教科書を作りたい。せっかく講義をさせていただくわけなので、こちらとしても努力をしないとダメなと思っている。土壤協会から講義をさせていただくのは私だと断言できないが、協会としてはそのようにしていきたいと考えている。

委員) 土壤肥料の30時間は全て土壤協会さんに依頼するということか。

事務局) お願いできればと考えている。

委員) 講義30時間というのは、具体的には2時間の授業を15回ということか。

事務局) ここに記載している時間は、農大の換算時間で、実際には45分を1時間としている。農大の授業は1コマ90分なので、それを2時間と換算している。30時間は基本的に14コマ28時間と1コマは試験で、合計15コマ30時間という計算。

委員) 有機農業概論の所も今の資料では保田茂先生が有機農業の歴史を教えるでもいいよと言っていたかという事で記載されていると思う。保田先生も「日本の有機農業」という本をずっと以前に書かれているので、それを現在版にリニューアルしつつ、保田先生も今もいろいろ教えていらっしゃる。せっかく委員として有機農業実践者がいらっしゃるので、例えば〇〇農園の技術、△△農園の技術などを、上手く兵庫県版のオリジナルテキストとしてまとめてはどうか。まだ1年あるので。

委員) 賛成。

委員) 丹波市で、有機農業の協議会があり、そこで、先生を呼んで研修会をやっている。それは基本的な技術・農法だが、おいしさ・栄養価重視、多収を目指した農法を学び、基本的な能力が少しレベルアップしてきたり、いろいろ変わってきている。例えば微生物を使うとか。そういうことも大事だと思う。ちょっと外れる部分があるのかもしれないが、こういうことをやって少しずつ結果を出してきている。名前を出すとジャパンバイオファームの方。この方も世界・日本各地を回って基本的な技術を教えながら、また

農家がやっていることを学んでレベルアップさせていくという方なので、そういった方の話を聞くのも大事なのではないかと思っている。特に最近は異常気象で栽培しにくくなっているの、いろいろ変えていかなければ有機農業ができなくなってしまうと私は思っている。

委員) 概論の中なのか分からないが、授業のどこかに異常気象のことも含めた方が良いのではないか。

事務局) 有機農業は慣行農業よりも環境の影響を大きく受ける。

事務局) 兵庫県オリジナルの教科書と言うのは非常に良いアイデアだと思う。それが有機農業概論の中なのか、先進事例講義で県内の先進農家の方に、いろんなパターンでお話しに来ていただいて、そのときのプリントをファイリングしていくのかなどは検討させていただきたいが、できればそういったものを作っていきたい。

委員) 時代とともに有機農業のあり方も変化して行く。固定的に考えるのではなく、常に新しいファイルをファイリングしながら本当に生きた内容を教えていければ、それが兵庫県のオリジナルになる。

他県の悪口を言うわけではないが、「土壌肥料学」となっている県がある。農業大学校では「学」を教えるのではなく、技術論を教えるべきだと思う。技術論に特化して教える事が兵庫県農業大学校の特徴的なものとなる。先ほどの高温障害もまさに先端的な技術論だ。これ抜きに学問をやっていたのではダメだと思う。

委員) こられる学生も栽培経験がある方が前提になると思うので、いろんな課題に対して対策を考えられる人を育てるカリキュラムになると良い。

委員) 私はもう普通にやっていたら（農作物を）作れないように感じる。何か考えて変えていかないと収穫量が減ってきている。

委員) 私が（話をすると）考えると、概論と言うより、先進事例の方が気楽。BLOF 理論は大変有名だが、私がやっている炭は非常にマイナーなので、先進事例の方がのびのび（話が）できる。

委員) 大阪府のある市では「〇〇市は BLOF をします」みたいになっていて、たまたまそのときは私が意見を言えたので、「そうせずに、有機農業という枠組みの中で、いろんな手法の中からやりたい人がセレクトできるように提示するのが良いと思う」と意見したら、今は少し緩和されてきている。今日は炭育ちの方もおられ、BLOF の方、イオンさんもやり方があると思うし、分かり難い自然農法だったり、自然農法も秀明があり、MOA があるので、できる限りこの概論の中で、方向性を誘導するのではなく、こういうのがあるというのを提示するようなテキストにしてはどうか。それを踏まえた上で、先進事例の先生方の話を聞いて自分はこのやり方が良いと選べるような、いろんな道をつけるカリキュラムになっていたら良いのではないか。

委員) 有機農業の基本（の栽培方式）というのは一つで良いと思う。いろいろあると迷うので。そこからどう考えるかは、やる人それぞれで良いのではないか。

委員) (頂上目指して) 上っていく道はAの道だったり、Bの道だったり他の道もあるかもしれないが、そのベースになるのは土壌になると思うので、そこが共通項になると思う。

委員) たぶん皆さんそれぞれにやり方というのはあると思うし、取り巻く環境もあると思うので、それをどう活かすかはそれぞれ違うと思う。

委員) その上で、最初に言われていた、自給自足的なものは、大学校としては外すということで、点線か何かで枠外とするような概論であつたら良いと思う。

委員) 今日、社町駅から農大まで車で来る途中の田んぼで山田錦が全て倒れていた。これは倒伏するか立っているかで米の品質が全然違ってくるので、そこら辺はすごく良い素材が周りにあるような気がした。現場に本当のやり方があると思う。それを学生とともに「そうじゃないか」「こう思うんだけど」と考えていけるようになれば素晴らしいと思う。

委員) 講師案でどなたか情報提供などございますか。

委員) 今、丹波市(の農の学校)で講師されている〇〇氏。経営もやっていたし、内容も分かりやすい。

委員) 神戸でもBLOFでやられている人もいるし、保田先生方式の方もいるけど私で選定するのは難しい。普及センターと相談してはどうか。私は経営の実態とかも分からないし。

委員) この後でも具体的な講師案を思いつけば事務局にメールなどで連絡してください。

委員) 土壌肥料は講義させていただくことになると思うが、先ほどの高温障害の話は土壌肥料の他に、植物生理にも入ってくる部分があるので、植物生理の講師とも講義内容の打合せをしておいた方が良いと感じている。

2 実習方法について(資料4、資料5)

委員) ありがとうございます。資料4、5は内容が多岐にわたっているが、資料4を1つめの議題、資料5の1番と2枚目の栽培計画と一緒にして2つめ、3つめが休日及び長期休暇のほ場の管理方法ということで、どれからでもいいので、ご意見をお願いします。

委員) 資料4の「毎週1日」と「一定期間」について、毎週1日なら、全体的なもの 季節の流れが見えると思う。一定期間の2週間ほどの実習では、肥料を撒いて耕して畝作ってビニール敷いて種まいてという工程の流れが見られる。伝える農家からすると流れが見やすいかなと思う。

来られる方の経験値がどれくらいかにもよるし、どう考えるかによる。神戸市のネクストファーマーの研修でもここが一番悩むところ。冬場なら私の地域でも日が昇るのが遅いので、10時くらいからの研修の方が良いし、冬至が来たり夏至が来たり、秋分の日などが来て植物生理が変わっていくときに農家は何をしているかを見せたりできると

きもある。それを分かって農家は時期をずらすことによって品薄だけどそのときに出せば高い価格で売れるのを見ることもできる。

全体の流れを見られた方がいいという方は1（毎週1日）になるし、基礎的な肥料まいて耕してビニールして種まくという流れだったら、時期にもよるが2の方が見られるのかなと思う。

事務局） ちなみにネクストファーマーの人はどんな形で研修に来られているのか。

委員） いろいろ。週に1回の人もあるし、時間のある人はまとめてくる人もある。

委員） 1と2それぞれの時間数を減らして両方やることはできないのか。

事務局） 内部の検討で、それもあかなという話も出ている。ミックスでの実施。

委員） 学生が何をみたいかで決めたらどうか。それによってはミックスの方が良いのかもしれないし。例えば太陽熱養生をみたいだったらまとめての方が良いし、新規就農で来られることを目指していれば毎週の方が地域に根付きやすいし。

事務局） 太陽熱養生の話でも、農家実習で見てきたことを自分の実習ほ場でやってみて、上手いいかないことをまた相談できれば良いと思うが。

委員） 人数が100人とかではなく10人なので、ハイブリッド案を頂いていますので、もう一つハイブリッドだったらというのを資料4に追加して今検討できそうか。やり方は統一しないといけないのか。

事務局） 他の科目の授業もあるので、バラバラに実施するのは難しい。統一でやらないといけない。

委員） その場合、地域によって大事な作業の時期が違ってくる。同じ地域だったら時期も決めやすいと思うが。

事務局） 農大のカリキュラムで、講師の都合などで日を変更する場合、どこまでが許容範囲か。

事務局） 変更は良くある。基本は実習の時間との交換になる。

委員） 農家実習は皆バラバラで行くのか。それとも何人か一緒に行くのか。

事務局） バラバラ。

委員） 一人ずつか。二人で同じ農家に行くこともあるのか。

事務局） 基本は一人ずつ。農家に受け入れていただかないといけないので、1軒に5人行っても迷惑かかると考えている。毎週1日の場合は、毎週何曜日と決めて行くことになるので、農家の作業をわざわざその日に合わせて変更して頂く必要なく、学生は行ったその日の作業を体験させていただくと言うことで構わない。可能な範囲での変更はありがたいことだが。

事務局） 農大の実習ほ場を個人管理と言うこともあり、農家派遣実習にたくさん行ってこちらがほったらかしになるのも問題あるので、悩ましいところ。

委員） どの農家にも農繁期と農閑期があるので、農閑期に1日行ってももったいないと思う。それをハイブリッドにして、ポイントとなる所にかためて行くとかすればどうか。実習先との相談になるし、農大で何を栽培するかにもよる。

委員) ちょうど農大での栽培品目の話が出たので、資料5の1番の栽培品目についてご意見いかがですか。

私がこの資料を見せてもらった時に最初に思ったのが、夏野菜の収穫地獄が味わえるのが8月なので、夏野菜を7月で片付けてしまうのではもったいないのではないかと思ったが(皆さんは)どうか。ナスも秋作もするなら9月まであるだろうし。

委員) 自分の所は、実際は夏も何か作るようにしているが、基本的には暑い太陽熱を利用してビニールをしっかりと張ると言うのは、秋・冬に向けてはとっても大事なことで、それをどう捉えるかによるのではないか。

委員) 夏の太陽熱をやるのとやらないのとでは、秋作の収入にも大きく影響すると思う。ベースの所では。

委員) 慣行農業との違いで一番大切なところはそこ。ここをやっておけば何でも作れるので。それがなければいろんな問題が起きてくる。

委員) 太陽熱のポイントを実習でしっかりと押さえられるのと押さえられないのとでは、就農した後も大きく変わってくると思う。ここはしっかりとやった方が、自分の所もそうだし、習いに行った先でもやられていると思う。

委員) やった所とやってない所で対照区を作って比較するとかは無駄なことか。

委員) 一度経験すれば良いと思うが、(やってない所は)後はただただ地獄が待っている。

委員) ここから見える部分はめちゃくちゃ多い。太陽熱やスチームとか使ってやって収穫すると、そのまますぐ次に種まいてもできちゃう。2, 3回できちゃう。なので、半不耕起、不耕起栽培みたいなことも可能なほ場に将来的にはなってくる。そういうことを考えるとどこに力を入れるか、それを見た人は自然農的と言うかもしれないが、ベースが全然違う。これからは気候が変わってきているので、そういうことも活用していかないといけない。肥料代もどんどん上がってきている。私が直面しているのはそこ。だから微生物のデータは取っているし、野菜の栄養価のデータも取っている。むしろこれらのデータを取っていくというのも大事なこと。

委員) 太陽熱養生は必須な勢いで、あらかじめいくつか品目とかもご提示いただけないか。

委員) これは農家実習で勉強してきたことが活かせる方が良いのではないかと思う。それが選択品目になるのかもしれないが。

事務局) そうなるかなと思っている。共通品目は、失敗しにくくて、有機農業を学ぶため、栽培技術を学ぶのに適した品目で設定して、自分が就農するときに取り組みたい品目を選択品目として選んでもらい、その品目を作っている農家に農家派遣実習に行くという流れかと想定している。派遣実習の行き先は、4月～5月頭くらいで希望品目を聞いて受入可能農家とマッチングして、行き先を決める想定。

委員) 作りやすいということなら、アブラナ科は外した方が良い。冬場であればハウレンソウも割と作りやすい。果菜類も割と。プロのトマト農家、キュウリ農家もあるので、どのレベルを狙うのか。数値的な栄養価なのか、見た目のそろいなのか。

委員) 私は野菜をあまり作っていないので話しにくいですが、やはりおいしい物を作らないと売れない時代なので、栄養価をしっかり勉強してやるのが良い。肥料設計で変わってくるので。例えばニンジンではちゃんとしないとA品率がすごく悪くなる。間違ったことすると全然品物にならなくなる。その原因を学ぶのも勉強と思う。

委員) まだあまり完璧ではないほ場で栽培、出荷していくのであれば、ミニ的なもので、先行逃げ切りでいく方法もある。他の人が出していない時期に出せるという意味もある。そういうことまで含めると、戦法はいろいろある。

事務局) 例えばビニールハウスで、4月入学で栽培を始める場合、どんな品目が考えられるか。

委員) F1種子でもよければニンジンも時期ずれで栽培できるものがある。アブラナ科はあまり勧めない方がいいかもしれないが。

委員) ニンジンも太陽熱消毒が上手くいったどうかの結果がすごく分かりやすい品目だと思う。

委員) そうだと思う。また、夏向けの野菜を早めに蒔くこともある。学生だし、そういったことを言って良いのかどうか。4月だけでも、ハウスを閉めて薄めのビニールでピシッとかけておくと2、3週間ぐらいで結構温度が上がる。通常は積算で900度とか言うが、そこまで行かなくても効果はあるので、苗をしっかり作って移植していけば結構いける。

委員) 育苗はどのように考えておられるのか。

事務局) 育苗ハウスという概念を抜かしたままここまで来てしまっているの、今悩んでいる。

委員) 露地かハウスで苗作って移植でも良いのでは。オーガニック的には移植の方が適している。

委員) 今から育苗ハウスを増やすことはできないのか。

事務局) 予算システム上難しい。露地にトンネルを厚くして育苗するとか。

委員) ちょっとだけならハウスの入ったところで苗を作るとかでよいのでは。そこにお金かけなくても。

委員) 夏収穫の軟弱野菜は何があるか。

委員) 葉物だったら、ツルムラサキとか空心菜がかたそう。

委員) 事務局案の半分緑肥、半分野菜栽培などはどうか。

委員) これでいいと思う。ポイントを押さえられている。

委員) 無理がなさそうですね。

委員) 今年みたいに暑かったら9月頭から蒔けるのかなと思うけど。上の白ネットとかは必要になると思う。

事務局) 1本のビニールハウスで半分緑肥、半分野菜は可能か。

委員) 虫の対策かな。緑肥を刈った時に虫が野菜に移るので、一旦ビニールをかけて対策して、すぐに耕すとかそういうテクニックが必要になる。

委員) 実習ほ場の指導員もいるのか。

事務局) 必要だと思っている。まだこの人がするという事は決まっていないが。

委員) 定期的に状況を見て、あーだこうーだと言う人が必要かなと思う。

委員) 今、私が農大生になったつもりでシミュレーションした資料を見ると、農大での実習と農家での実習が交互に来ている。場所が変わることが大丈夫かなと思う。むしろ農家実習をひとまとめにして、農大での基礎実習と確実に分けた方が良いのではないかなと思う。農家実習は応用編だと思う。

委員) 松本委員はどちらかというとなら2の一定期間まとめて実施の方が良いのではないかなという意見か。

委員) そうですね。

委員) 先ほど事務局が発言された、農家実習で見てきたことを、自分の実習ほ場で再現するという事は、毎週1回なら可能となるが、その点はどうなのか。

委員) 農家派遣実習は、トータルで44日あるということか。

事務局) 毎週行く場合は28日、まとめてなら16日のどちらかとなる。

委員) 資料4は2択となっているが、先ほどは日数を調整してハイブリッドで実施してはどうかという案も出ていた。

委員) 学生が、できるだけ早く覚えなさいといけない講義を4月5月でできるだけ集中してやって、それをやりながら、実習ほ場で基礎的なことをしっかりやって、その後空いたタイミングで補完的に農家を見に行くイメージですね。

委員) 分けた方が良いかなと思う。

委員) 時間的な順番も大事かもしれない。共通項の土壌肥料とか大事な部分を4月5月にできるだけ先に詰め込んだ方が、後でするより良いかなと思う。私も生徒も気持ちになって考えたらそんな風を感じた。

事務局) そうですね、貴重な意見をありがとうございます。事務局で事前に話していたときには農家に行って学んできたことを実習ほ場で実現しつつ学んでいくイメージだったが、そのマイナス面の意見も聞けてありがたいです。

委員) 休日や長期休みの管理についても含めてご意見頂けますか。16日間農家さんに行ってしまうと、実習ほ場はほったらかしになる。それも栽培品目によってはえらいことになる。同じ期間に全員がいなくなるなら。ずれていると誰かが作業をお互いに助け合えると思うが。

事務局) 全員いなくなるので、農大のほ場であまり作業が無い状態にして農家実習に行かせて頂くようなことを考えないといけない。

委員) 2年あれば春夏作と秋冬作で構成できるが、それは無理なのか。

事務局) 無理。

委員) 4月スタートで3月までというのが栽培から見たら一番難しい。1月から12月の方がよい。それか夏の9月スタートにするか。

事務局) 実践研修は9月スタートになっている。

委員) すごく贅沢だが4月5月に最初に必要な座学と農家実習に行って、そうしたら最初の畑準備から播種・定植までを体験できると思うのでそれに注力して、それから実習

ほ場の太陽熱消毒をきっちりやってスタートする。農作物の栽培は少し短くなるけどその方が良いように感じる。何も無い状態で栽培を始めても失敗しそう、失敗することも大事だと思うが。もちろん学生の経験値や知識の量にもよると思うが。

委員) 座学と実習を分けるという意味か。

委員) 前半に座学を詰めて農家派遣実習もキュッとして1週間くらいで畑作りから播種・定植の作業を学ぶ。農家実習はハイブリッドにして、途中の管理や収穫は毎週1回行くみたいに。

委員) (資料4で)4月にずっと実習が入っているのはどういう意味なのか。

事務局) 実習というのは必ずほ場に出て作業するという時間ではなく、雑多なことをする時間として実習を置いているので、入学後の最初の準備やその方がどんな農業をしたかを聞いて農家実習の行き先を決めたりなどを行う時間も含めて設定している。

委員) 実習ほ場の施肥設計やどんな肥料をどれだけの量入れるか、入れるタイミングなどはどのように教えてやっていくのか。

事務局) 具体的な事は決まっていない。

委員) そこと太陽熱の兼ね合いを、座学をやりながら平行でできることかなと思う。

委員) そうですね。平行でできる。

委員) よく分からないけど、学んできたことをそのままここでやることもできるという事ですね。

委員) できると思う。ありはあり。

委員) それで知識は後付けして行くということはできると思う。

委員) 今のシミュレーションでは4月8日から20日まではずっと座学が無い状態ですけど、これを入れ替えていく感じですよ。農家実習もこの辺に入れていく。

事務局) そうですね。

委員) それでも夏休みはある。

委員) 夏休みはずっと休みなのか。

事務局) 基本は休み。講義は全て無くなる。今の2年制の学生は、栽培している物の管理だけ当番制でやっている。

事務局) 夏休みもなんやかんやで半分くらいの学生が寮にいる感じ。

事務局) 最初に講義を詰めて実施する場合、早くやった方が良い科目は。有機農業概論、土壌肥料、植物生理、道具の使い方などの演習くらいか。

委員) 私が学生になったとしてイメージすると、このハウスに(栽培を始めるために、肥料として)何をどれだけ入れたらいいかがざくっと分かればいいかなと思うので、それが分かる授業が必要。

委員) 科目の中でも最初にやった方が良い授業があるということ。

委員) 後付けよりも最初に分かってやった方がいいと思う。データなどが説得力を持つので、成功する確率が高くなるかなと思う。それがまた売りになるのではないかな。だからその肥料の選定も気になるし、効果の出る肥料でいきたいし、入れすぎるという問題もある。それらをどうするのか。そこが分かる事がスタートラインかなと思う。ピ

ニールの引き方も BLOF の方法もあるし、違う方式もあるし、ビニールの種類も再利用できるがちょっと温度が低い P0 にするのか、「おんどとり」で温度を計っていくのも面白い。そこを深掘りすると後々役に立つと思う。データを残して（就農後の）自分の畑に行ったときに参考になるような、そういうのがあっていいのではないかな。

委員) 何 cm の深さで何度とかね。それは非常に大事。

委員) それと太陽熱消毒する時の水の量ね。どれくらい入れるのか。入れすぎても良くないし。そこをどの感覚で教えるのか。農家によってちょっとずつ違うと思うので。

委員) それはかなりの技術ですよ。

委員) 座学で農家さんがこっちに来て講義することはあるのか。

事務局) オリジナル科目の先進事例講義で県内の先進農家に来ていただいて講義していただく。

委員) 最初に座学で聞いておけば、そんな違いがあるのかという気づきになるということ。あと休暇中の検討案は出てこないですか。それは各自管理することで仕方ないという感じ。農大生は当番制なので、アカデミーも当番制にすべきか。

委員) 農大生は当番制だが各自気になることがあれば出てきたりしているのか。

事務局) 結構無責任な所がある。セル苗を枯らしたりしているようだ。

委員) それ（枯らすこと）も勉強になる。

委員) 感覚的に当番制というのは責任が分散してしまう。自己管理が良いのでは。

委員) そう思う。農家になったら当番制はできない。

委員) どうしてもの時だけお互い助け合う程度で良いのではないかな。

委員) 自主実習という感じですね。

事務局) 実践研修の研修生は夏でも毎日出てきている。就農を目指せばそうなるのかなと思っている。

委員・委員) 出て来られると思う。

委員) では自己管理と言うことで。時間となりましたので、まとめると、一つ目のカリキュラム及び講師案については、教科書以外にもオリジナルテキストの作成も同時に考えてはどうか、二つ目の実習方法については、ハウスや露地で作りやすい品目の一例を頂きました。ほ場利用計画は、これで良いのではないかというご意見を頂いた。ただし、緑肥を倒す時に虫対策が必要ということ。4月5月にはできれば座学を中心にしつつ、直接自分たちのほ場ではなく農家さんのところに行くことに主眼を置いてはどうかということと、休日と長期休暇中は通学生でもあり、個別のほ場なので自己管理していただく、シミュレーションは「× (バツ)」にせず「自主実習」のように休みという概念ではない方が良いのかもしれない、という感じでいただいた意見をまとめさせて頂いた。次回までに事務局で整理・とりまとめ頂きたいということで、進行を司会にお返しする。